ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉絆(ネクサス〉

善宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉絆（ネクサス）

【Ｎコード】
Ｎ６８２４Ｖ

【作者名】
善宗

【あらすじ】
女性しか扱えない兵器インフィニットストラトス通称ＩＳ――まぁ物事には必ずと言っていいほど例外が一つや２つはつきもの、これは一人の例外「織斑一夏」が主人公ではなくもう一人の例外「真木継夢」が「絆」の名を持つＩＳを使って学園生活を暮らしていく物語である。

※注意※

この作品は作者がふとした思いつきで書いた作品の為、

・独自設定や解釈、キャラ崩壊が多い。

・ウルトラマンとのクロスだが、ネクサス側で出るのはネクサスとノアぐらい

・一夏がいじられまくりですがアンチでもヘイトでもありません！！ただネタキャラ化しているだけです！！

以上の事で一つでも嫌だと思う項目がある方は、見ないことをお勧めします。

もし以上の事で大丈夫な方はどうかウルトラマンの様に、暖かい目で見守って下さると助かります。

ネクサスプロローグ（前書き）

今回プロローグは短編を少し改造した物であまり変わらないので
そこを注意してお読み下さい。

ネクサスプロローグ

プロローグ「ウルトラマンになる男」

ＩＳ、正式名称は『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能をみせつけたことから宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていった。

またＩＳには謎が多く、その全容は明らかにされていない。特に心臓部であるコアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されておらず、完全なブラックボックスとなっている。また、原因は不明であるが“基本”ＩＳは女性にしか動かせない。　が、物事には例外がつきものでこれはその例外の一人のお話である・・・・・

俺は今束さんが開発した飛行機の後部ハッチの前にいる。

ゴウンゴウン・・・

〔はろはろ～つぐみん、準備はいいかい？〕

俺の目の前のモニターにはウサ耳のカチューシャをつけた女の人篠ノ乃束が映っている。

「つぐみんって言わないで下さいよ、俺は男なのでましなのにしてください。」

〔じゃあつぐむん！「それで…いっか！」、今回はＩＳを使ったはじめての実戦、しかも相手にＩＳがいるから怪我しないように頑張ってね！〕

「うっし、了解！！」

俺はポケットからエボルトラスターを取り出すと飛行機の扉が開いていき、ハッチの中に風が吹き込み、下には銃弾が飛び交う戦場があった。

下では一機の黒いＩＳを２機のＩＳを追いかけていた。束さんからの話だと黒い方のＩＳはシステムが損傷していてろくに動けてないらしい。

〔あと、向こうにつぐむんってことバレないように音声変換システムを使うことを忘れないように、いいね？〕

「はい！…と言っても音声変換システムの声も元は俺の声何ですけどね・・・では真木（まき）　継夢（つぐむ）、出ます！！」

僕は飛行機のハッチから俺の父も愛した大空へと身を投げ出し、エボルトラスターを鞘から引き抜き、前に突き出し自分の相棒でまたもう一人の自分の名前を叫んだ。

「ネクアアアアアアス！！」

俺は赤い光に包まれ戦場へ向かって飛んだ。

―――――――――――――

「くっ・・・・待ち伏せか。」

急な上からの命令で訓練を終えた私はそのまま偵察に出ていたのだが、偵察の途中突如何者かに攻撃を受けていた。

敵の戦力は戦闘機に量産型ＩＳ数機で本来なら私には大したことは無いのだが、最初の不意打ちの時にシステムを損傷し、その際に使える武器が少なくなったため苦戦を強いられた。　戦闘機は潰したが、そこで私の武装は近接戦の通信で撤退を呼びかけられているが、私は教官のようになりたい！！

そしてそのために、今敵に背を向けることなどできない！！

ビー！！ビー！！

「くっ！？」

シュバルツレーゲンのエネルギーが無くなり、ＩＳが強制解除された。襲撃者の一人は

ジャキッ！

と手に持っていたマシンガンの銃口をこちらに向けたその時、空から光弾が降ってきて敵の武器を壊した。

直ぐに敵と私の間に何かが着地した。それは銀色と黒色の体、胸に赤いＹの字が刻まれたクリスタルをつけたフル・スキン型のＩＳ

が私の前に立った。

それは私の方を見る表情が分からないはずのその目は力強く、優しく感じた。そして銀色のＩＳは敵の方を見ると流れるように構えて

「ヘヤッ！！」

と叫ぶ？と敵に向かって真っ直ぐ走った。

「真っ向から来るなんて馬鹿ね落ちなさい！！」

バララララ！！

一機の敵ＩＳはライフルを構え撃つが銀色のＩＳは腕をクロスして

ガキキキン！！

弾を防ぎ、更に速度を上げ接近した。

「なっ！？」

敵の一人は驚いて動き、を止めたがその瞬間銀色のＩＳは相手の懐に近づき、

「シェアッ！！」

「きゃあああああ！？！？」

銀色のＩＳのパンチで吹き飛び

「ハァ！」

もう一機のＩＳは剣を出し、襲い掛かるが銀色のＩＳの腕は光りだし、

「シェアッ！！！！」

そのまま腕を振って剣を切り、そして腹部に蹴りを放ち、敵のＩＳをもう一機にぶつけると両腕を胸の前に拳を天に向け平行に持っていくとエネルギーが集まり、そのままＹを描くように腕を上げ、

「ヘヤッ！！」

腕を縦にクロスさせた。すると物凄い量の青い光が出て敵に当たる。

「「キャアアアアアアアアアアアアア！？！？」」

敵は叫び、光流が終わるとそこには気絶した女性が二人いた。銀色のＩＳはその二人を寝かせると私に近付いてきた。私は攻撃されると思い身構えた。すると目の前のＩＳは右手を胸の前にかざし、その手が赤くなると私にかざした。手から赤い光が出て私の足にあった待機状態のＩＳに入っていくと

『エネルギー充填完了、再起動します。』

と言い私のＩＳは再び展開された銀色のＩＳはそれを見ると気絶した二人に指を指した。

「あの二人を運べというのか？それと貴様は何者だ。」

銀色のＩＳは頷くと目の前の地面に指で文字を書き始めた。それは英語で書き終えると立ち上がり空を見て

「・・・へヤッ！！」

驚くべきスピードで飛んでいきほんの数秒で見えなくなった・・・私は地面の文字を見て呟いた。

「ＵＬＴＲＡＭＡＮ・・・ＮＥＸＵＳ・・・マン？あいつ男なのか・・・いやそれはないか。ＩＳは女しか使えないからな。」

僕は飛行機に戻りハッチの扉が閉まると、別の部屋でデータを取っていた束さんが来た。

「お疲れ～つぐむんいい結果だったよ。うん、ネクサスの超圧縮マイクロ装甲の耐久性に、新作のエナジーコアの稼働率も今までよりもよかったよ。」

『へヤッ！！』

「それとクロスレイ・シュトロームに関してはむしろ威力を下げなきゃいけないからね～『シュワァ』まあこれは簡単にすむけどそれと『ファ？』音声変換システムを解除するか元に戻りなよ、『へヤァ！？』そのままだと分かりずらいよ。」

その言葉に僕は慌ててネクサスを解除した。すると束さんは衝撃

の言葉を言った。

「そして君にはネクサスの調整が終わり次第ＩＳ学園に行ってもらうよ。」

「へ？何でですか！？」

ＩＳ学園と言うと、ＩＳを扱う人たちを育てる学園で確か女しかいないはず・・・つまり

「女装しろですか・・・いやだな～「いや、男としてだからねもう君の存在を隠す必要はないし」・・・へ？冗談はウサミミと格好だけにしてくださいよ。束さん」

「つぐむんヒドい！！それに嘘じゃないよ～～・・・ほらこのニュースを見て」

僕は飛行機に備え付けのテレビを見るとそれは日本のニュースで何故か昔の友達の顔写真があった。そしてその内容は……

〔ついにＩＳを使える男を発見！！その男の名は織斑（おりむら）　一夏（いちか）・・・〕

「あれ？一夏も使えたんだ？」

僕は驚いていると束さんは携帯端末を取り出し

「まあ、それはいいとしてここに君がＩＳを使えるという私の名前入りのメールがあります。」

「ほいほい」

「さて送り先はこのテレビ局に設定しています。これで送信を押すとどうなるかな？」

「メールはテレビ局に届き、大混乱は間違いないですね。」

「そういうこと・・・では送信ッ！！」

「あ…」

ピッ！

携帯端末の送信ボタンを押した画面にＳＤ化したネクサスが手紙を持って飛んでいく絵が出て少ししして送信完了の文字が出てテレビの方をゆっくりと向くと

〔え？なんと速報です！！つ、つい先ほどＩＳの開発者で現在消息を絶っている篠ノ乃束博士からもう一人のＩＳを使える男の存在を発表しました！！もうどうなっているのよ！！〕

テレビのアナウンサーさんは最後の方は言葉を荒げながら言った。

「あ～あ、大変な事になりましたね。」

「意外と落ち着いているのね・・・と言うわけでつぐむん、ＩＳ学園に入学してくれるかな？」　束さんは黒いサングラスをかけながらマイクを俺に近づけながら言った。俺は足をポンと叩き

「束さんの頼みなら元から断りませんよ・・・俺にこの“足”とネクサスをくれたのですから・・・それといい〇も！！」

「かっこいいこと言ってくれるね～じゃあ今日本上空だからね。

ネクサスの最終調整をしてから投下するから。」

「はい！！」

～数分後～

俺は着替えを入れたバッグを肩にかけ飛行機の扉の前に立った。

「では束さん行ってきます！！」

束さんは手を振り、

「向こう（ＩＳ学園）にはちーちゃんがいるから大丈夫だし、それとネクサスは私とつぐむんの傑作だから政府に気をつけてね～束さんが寂しくなったらいつでも言ってきて良いからね。束さんがハグハグしてあげるから！！」

と言いながら扉の開放スイッチを押した。

「最低でもコアの事だけは絶対口を割らないよう努力しますよ。（寂しくはならないように気を付けなくちゃな。）」

俺はそのまま空へ身を投げ出し、空中でエボルトラスターを抜いた。

「ネクサアアアアアアアアアアアアアアアス！！」

俺の体を光が包み、ネクサスになると地図を広げながら日本の大空を友のいるＩＳ学園に向かって飛んでいった。

またこの時継夢の飛んでいる姿をＵＦＯと勘違いした人がいたそうだが…またそれは別の話

ネクサスプロローグ（後書き）

次回は主人公の設定を紹介します。

主人公の設定（前書き）

短編の設定よりは詳しく書いたつもりです……

主人公の設定

主人公　真木（まき）　継夢（つぐむ）　、性別、男

外見：ウルトラマンネクサスの千樹憐（せんじゅれん）

設定：生まれた時は体が弱く病気がちだったが大手術をして助かるが、その数日後戦闘機パイロットであった父の真木舜一（まきしゅんいち）が事故で死んで退院からは空手をやっている叔父の所へ行き、体を鍛え頑丈な体になった。将来は空を飛びたいことから民間機の航空パイロットを志望していた。

束と会ったのは中学二年の夏休みに山に鍛錬に言った時土砂崩れに巻き込まれ死にかけた時に助けられた。その際両足を失い絶望になり何度か自殺を図ろうとし、束に見つかり怒られる。その時空を飛べない自分は意味が無いと愚痴ったが、それを聞いた束は

「それなら私が君に新しい足とセットで空に行くキップをあげよう。」

と言ってネクサスとＩＳの技術を流用した特別製の義足をプレゼントされた。そのため継夢は束に感謝していて義足が馴染むとどんな雑用も引き受けた。そのためＩＳのことはよく知っている。（但し知識だけで整備に関しては簡単なものしか出来ない。）

一夏とは小学校の時に叔父の道場へ来た千冬に引っ張られてきたのが初めての出会いで、その後苛められていた箒を一夏と一緒に助け、仲良くなった。（因みに千冬は継夢が生きている事を知っているが一夏は知らない。）

そして千冬とは姉弟子、弟弟子の関係（師匠は叔父）入門したのは継夢の方が早いが千冬の方が強かったので序列では千冬の方が上で何回か千冬と手合わせをしていく内に千冬に（少しおかしな方向に）気に入られた。

ちなみに継夢の葬式の時、千冬は周りの目を気にせず泣いた（一夏曰わく2日間泣いていたらしい）。そして束から継夢は生きている事を聞いた時は喜び過ぎで寝不足になったとか……

継夢のＩＳ、ネクサス（継夢はウルトラマンネクサスと名づけた。）

束が継夢の為に特別に作ったＩＳ、継夢の義足とセットになっていて、他の人は装着できない例え出来てもが頑丈な鎧しかならないらしい。（それでも凄いけど）　因みに継夢の義足にはＩＳの技術が搭載されていてＩＳを展開しなくても水の上を走れたり、高いところから飛び降りても大丈夫らしい。そして色んな技術を詰め込んでい作っているので何が起こるのか継夢にも全く分からない。

ＩＳの武装は基本は内蔵火器が豊富だが武器は“今の所”は一切無いが継夢自身は肉弾戦の方が得意なので特に問題は無い。しかし内蔵火器の威力は高くその分エネルギー消費が高いためエネルギーが少なくなるとエナジーコア（ジュネッスだとコアゲージ）が点滅するようになっている。

又ネクサスにはＡＩが積んであり、継夢の戦闘をサポートしたり、継夢の戦闘パターンで新たなフォームを作ったりする事が出来る。

今変化可能なフォームはアンファンスとジュネッスのみだがいず

れ増えるかも？

ワンオフアビリティ：ウルトラガッツ【超根性】

説明：エネルギーが一桁台になり、継夢の心拍数やアドレナリンの数値が設定された数値、負けたくない思い等で発動、アビリティ発動中は大ダメージや継夢が気絶しない限りエネルギーがゼロにはならない。（作者の勝手な妄想だがウルトラマンが3分以上戦っている描写があるのは根性のおかげだと思っている。）

余談だがアビリティ発動中に笑わせても解除できる。

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！

この作品のプロローグは短編の「インフィニットストラトス×ウルトラマンネクサスをやってみた。」がそれとなりますのでそちらを見てからこれを見ると多少は分かりやすい…はず

それではどうぞっ！！

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！：前編」

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！！：前編」

千冬ｓｉｄｅ

事の始まりは一本の電話からだった。かけてきたのはともだ・・・腐れ縁の篠ノ乃束からだった。内容は

「一週間後はＩＳ学園の入学式でしょ？その時一人の子を入学させるつもりだからよろしく♪」

と言った・・とりあえず準備をしたが今朝のニュースを見て驚いた。まさか死んでいたと思っていたあいつが生きていたとはその時、また私の電話に着信が入り、

「いまからつぐむんをそっちに行かせているから校門で立っていてね♪それじゃ後はよろしくね～ち～ちゃん（はーと）」

と言って電話を切られ、私は校門に出たが・・・どうやって来るのだ？パスポートは恐らく束と行動していたから持ってないだろうし、電車で来るとしても駅からここは遠いはずだ・・・すると

キィイイイイイイイイイイイイイイイイイイン・・・・・・

上から音がしたので上を向いた瞬間

ズン！！

私から数メートル離れた地点に何かが落ちた・・いや着陸したといった所か私はその場所を見ると銀色のフルスキンタイプのＩＳがいて私に気付くとＩＳを解除した。そして……

「千冬さん・・いや、今は織斑先生ですね！お久しぶりです。」

と満面の笑みでＩＳ学園の制服姿の真木継夢は私の前に来た。生きていたことに思わず抱き着きたいが

「ふん、生きているならさっさと連絡の一つでもするんだな！」

「ははは、すいません。織斑先生これからよろしくお願いします。」

と笑顔で言った。全くこいつは昔から変わらないようだ・・・だが

「お前、両足は無いはずだが・・・」

そう私も継夢が死んだと思われたとき、両足しかなかったから死んだと思ったが目の前の継夢にはしっかりと両足で大地を踏みしめている。すると

「ああ、この足実は義足なんですよ。束さんが特別に作ってもらってＩＳの技術も流用して作られているのです。そしてＩＳも少々特殊なんですよ。」

「いや、すまなかった。では教室に案内にするからついてこい。」

私は継夢を連れて教室の前までやってきた。すると

「以上です！！」

という愚弟の声が聞こえ

「すまないここで少しの間待っていてくれ」

「はい・・・」

千冬ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

継夢ｓｉｄｅ

千冬さんが入ってすぐに

スパアアアン！！

何かで叩く音がして

「りょ、呂布だあああああ！！！」

パパパパパパアン！！

「誰が飛将軍だ。この馬鹿者めが。」

一致―の声の直後に連打が聞こえた・・・さすがいっちー、昔からバカなのは変わらないね～。

「織斑先生、会議が終わったのですか？」

「あぁ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」
「い、いえっ副担任ですからこれくらいはできないと・・・」
「ではここからは私が・・・」
他の女の先生と千冬さんの話し声が聞こえ僕は待っていると
「キャアアアアアアアアアアアアアア！！！！」
「本物の千冬様よ！！」
「ずっとファンでした！！」
「私お姉さまに憧れて学園に来ました！！北九州から！！」
という女子の雄叫び・・・いや雌叫び？が聞こえ長くなりそうなので教室の前の扉で三角座りで待っていると
「それより遅れてきた奴がいる・・・入ってこい」
千冬さんの声が聞こえ教室に入ると俺の顔に集中する視線、結構の間束さんと二人で暮らしていたから慣れてない俺には辛すぎる！！でも自己紹介をしないと！！
「え～っと俺じゃなかった自分の名前は真木継夢って言います。好きなものは空とで嫌いなものは今のところわかりません。色々と迷惑をかけると思いますがよろしくお願いします。」
と言い礼をした。すると少しの静寂が教室を支配した後

「「「「「「「「「キャーーーーーーーー！！」」」」」」」」」

クラスの女子が叫びながら立ち上がりいっちーは女子の黄色い声により鼓膜を痛め耳を押さえながら

「耳が～耳がぁ～～！！」　となっていた。

「爽快な感じがする！！」

「マイナスイオンが出ていそう！！」

「疲れたときに癒してくれそう～～！！」

俺は女子の言葉にあはははは・・・と笑っていると横から殺気を感じその方を見ると千冬さんが睨んでいた。

「あの、織斑先生いかがなされましたか？」

「あ、いやなんでもない・・・」

すると俺の顔を見たいっちーが席から立ち上がり

「お前、継夢だよな！！」

と言い指を指してきた。っていっちー人に指を指しちゃ駄目でしょ。

「そうだよいっちー、俺はそれ以上でもそれ以下でもないただの真木継夢だよ。」

俺がそうかっこつけて答えるといっちーは

「でもなんで・・・足があるんだ？生きていても両足が無いはずだし・・・」

と言い俺は足に手を持っていき、

「義足だから取れるよ・・・ホラ」

ガチャ

僕は義足の片方を取ってみせるとクラスの女子の大半が

「「「「「「「キャアアアアアアアアアアアアアアアア！！？？・・・・・キュウ」」」」」」」

と叫び気絶した。

「あり？ちょっとばかり刺激が強かったかな？」

パシン！

「当たり前だ！！」

「いて！？あ、副担任の先生も気絶している・・・そこまで強いかな？」

その後千冬さんの一括で全員起き上がったけど怖いのはこっちの方だよね！！僕は一夏の隣の席になり、そうして最初の休み時間・・・

「継夢・・・辛いな・・・」

「ああ・・・・もう一度義足外すか？」

「やめとけ・・・また千冬ねえに叩かれるぞ。」

「そうだね・・・自習する？」

「そうだな・・・「ちょっといいか？」お？箒？」

そこにはポニーテールの女の子が立っていた。僕は

「一夏、彼女はあるようだから行ってきな。」

と言い、一夏に話し合いをしていくよう勧めた。

「で、でもいいのかお前はこの視線の中一人で耐えることになるんだぞ？」

「生き埋めになった時と比べれば何とかなる」

「お前が言うとリアルすぎるな・・・行ってくる。」

「いってらっしゃい」

僕はポニーテールの女の子と一緒に教室の外へ出て行った。そして

「やっぱ辛いわ・・・・我慢我慢・・・」

こうしてＳＰを大きくすり減らし二時間目の授業を受けていた。

「（といっても僕は束さんの所にいたから問題ないけど、でも“普通”のＩＳの中はこうなっているのか・・・あっ、誤字みっけ）」

僕は横をちらっと見るといっちーが、大量の冷や汗を流していた。

「（いっちー・・・もしかしてわかんないの！？でも少しくらいはわかるはずだよね？）」

すると山田先生が

「織斑君、わからない所があったら遠慮なく言って下さい！」

と山田先生が言うと一夏は手を上げ、

「先生！！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部わかりません！！」

というと皆はずっこけ俺も思わず

「この阿呆おおおおおおおおおおおお！！」

ガイン！！

「グハッ！？」

一夏の頭に俺の足が義足であるのを忘れ、おじさん直伝の蹴りを食らわした。すると織斑先生が近づいてきて、

「織斑、入学前に渡した参考書はどうした？」

織斑先生がそう言うと、一夏は頭をさすりながら

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました。」　立ち上がると同時に

バシーン！！

織斑先生の出席簿攻撃が決まり、

「必読と書いてあったはずたぞ、後で再発行してやるから1週間で覚えろ。」

「一週間はちょっと「やれと言っている」……はい、やります。」

一夏は織斑先生の覇気のこもった視線にただ小さくなりながら席に座った。その姿を見て可哀想だと少し思った俺は一夏に

「俺も微力ながらも手伝うよ。」

と小声で言い、一夏も手を合わせて

「すまない、助かる。」

この後俺が一夏に説明しながら授業が終わった。そして休み時間に周りの女子の視線に耐えながら、ＩＳの基本知識を分かりやすく説明していると

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「へ？」

声をかけられその方を向くとロールがかかった金髪のいかにも偉そうに立っている女子がいた。俺は

「（これはややこしいことになるかも…）」

俺がそう思っていると金髪の女、名前は確かセシリア・オルコットは

「ちょっと話を聞いているのですか？」

と言い俺達に向かって人差し指をビシッといった感じで指差した、俺と一夏は

「ああ、すまない。」

「で、何のようだ？」

と返事をするとセシリア・オルコットは大袈裟な感じで

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「……」

「ハァ……」

どうやらセシリア・オルコットは女尊男卑の今の世の中の典型的なタイプの人間のようだと判断した俺は思わずため息が出てしまった。またこの時、一夏がポカンとしていたので

「ちなみに一夏、お前さんは織斑先生の方を気にしていて聞いてなかったかもしれないが、彼女はイギリスの代表候補生で入学試験主席のセシリア・オルコットだよ。さらに代表候補生とは各国代表のＩＳ操縦者の候補生…要はエリートのことだ。」

俺はそう言ったが…代表候補生の事は言わなくて良かったかな？文字でわかるだろうしでも一夏は馬鹿だし…

「おお、流石は継夢だ、ＩＳの事はよく知っているし俺が聞きたかったことも教えてくれる。物知りだな！」

…訂正しようこいつバカだ！一夏の家にもテレビがあるはずだからニュースでも見ているはずなのにわからなかったとか…馬鹿ジャン！！まあ、僕はＩＳ関連の事は束さんに教えてもらったし、ほかの事は僕に会った時の束さんは世間に興味がなかったから僕がおぼえていなきゃならなかったから…苦労したよ。まあ、今は少しは世間の事を気にしてくれているけど、その時

「んんっ！！私がいることを忘れていなくて？」

半ば空気になりかけていたセシリアが咳払いをして、俺は

「ああ、すまない。」

と言い、セシリアは俺達を指さしながら

「先ほどそちらの方（継夢）が言った通り、私はエリートですのよ、一緒のクラスにいることはとても幸運な事なのですよ！」

というと俺は

「そうか、いいことだなあ、感動的だなぁ、」

そして俺の言葉に一夏がすかさず

「だが・・・無意味だ！！」

と言い、俺と一夏は顔を見合わせてサムズアップをしていると青筋を立てているセシリア・オルコットは

「貴方達…この私を馬鹿にしているのですか！？」

「お前が幸運だっていっんじゃないか。」

「個人的には大規模な土砂崩れから生き帰った方が幸運だと思っているから、あっ、後織斑先生や一夏に会えた事とか。」

この後入学試験で教官を倒したとか倒してないとかでセシリア・オルコットは騒いでいたがちょうどチャイムが鳴ったのでとりあえず引いてくれた。ちなみに俺は束さんがあらかじめ織斑先生にドイツでの戦闘映像を見せたらしいので（眼帯の女の子は映していないのでセーフ）、教師を倒す試験はなくなった。

～三時限目～

三時限目は千冬さんじゃなくて、織斑先生の授業で、副担任の山田先生も後ろの方でノートを取りながら聞いていると

「ああ、そういえばクラス代表生を決めなくてはいけないな。」

と言い出した。名前からすると生徒会に行ったりとクラス長みたいな感じだろう。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ、まあ、俗に言えば学級委員みたいなものだ。さて誰が成る？自薦他薦は問わない。」

と説明すると一人の女の子が手を挙げ

「はい、私は織斑君がいいと思います。」

「え！？俺！？」

「私もそれがいいと思います。」

「ええ！？」

周りの女子から推薦を受けて困惑する一夏、そして俺を少し見つめた後

「なら俺は真木を推薦する！！」

俺を推薦してきた…俺は織斑先生の方に顔を向けて

「先生、これに拒否権は「あるわけないだろ」…デスヨネー」

俺達が落ち込んでいると

「納得がいきませんわ！！」

と大きな声を出しながらセシリア・オルコットが立ち上がり、

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

俺は個人的な意見としては中々面白いと思うぞ？（見せ物的な意味で）あ、でもクラス代表戦があるから、実力のある方がいいのか。

俺がそう思っている間もセシリアは

「実力から行けば、代表候補生のわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

イギリスも島国だけどそれにその発言は世界最強の千冬さんにも喧嘩を売っているものだよ？…そろそろプッツンしそうだよ♪勿論セシリアは僕の様子にも気づかず

「大体文化としても後進的な国で暮らさなければいけないということ自体耐えがたい苦痛で…」

流石に俺の堪忍袋の緒が切れ、俺は口を開こうとした時、

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

「一夏、それ僕も言おうとしたのに〜〜！！新しく他に思いつくのないし…」

一夏に先に言われ悔しがっていると

「あ、貴方達！わたくしの祖国を侮辱しますの！？それにイギリスにはいいものがたくさんありますよ！！」

セシリアはそう反論してきたけど…ねえ

「先に侮辱してきたのはそっちだろ？」

「そ〜ですね。さらに言わせてもらうと俺達が文句を言うなら真っ先に自分で手をあげろ。」

俺達がそう言うとセシリアは指をビシッと俺達に向け、

「決闘ですわ！！」

「ああ、いいぜ、やってやるよ。」

「その方がわかりやすいしな！」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いいえ、奴隷にしますわよ！」

「ああ、いいぜ！」

「俺も一向に構わない！…織斑先生、決闘はいつやるのでしょうか？」

「ああ、それなら一週間後の放課後に行う予定だ。」

千冬先生からの言葉を聞き、俺は頷き

「了解、後セシリア・オルコット、このアホ（一夏）が何か言う前に言うが、ハンデは俺達には要らない。そちらも全力で来てほしい。」

「アホってヒドイじゃないか！？」

と俺が言うとクラスから笑い声が出て

「真木くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんて大昔の話だよ？」

クラスの女子がそう言った時俺の机の中から緑色の光が輝き始め皆は最初驚いていた。特に…

「あわわわわ、真木君！？爆弾かもしれないので離れてください！！」

副担任で小動物的な感じがする山田先生が手をパタパタさせていたが俺は机の中からクリスタルの部分が光っている短剣を取り出し、

「“ネクサス”あれほど教室内で勝手に光るなって言っただろう？それにあれくらいで怒るなよ。」

俺の言葉に反応してネクサスは光が収まり、俺は皆に見せるように待機状態のネクサスを見せて

「ちなみにこいつは俺の相棒で束さんがノリでつくちゃった４６８機目の最新型ＩＳの“ネクサス”だ。」

俺が言い終わるとネクサスはよろしくと言うようにチカッと光り、

スパアアアアアン！！

千冬さんの出席簿アタックが飛んできた…いってぇええ！！

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！

後編は部屋割りの場面をやります。

～オマケの説明～

真木継夢のＩＳ、ネクサスにはＡＩが搭載されているが、ＩＳの姿勢や光線の出力を調整するために作った物なので、喋る事は出来ない。その代わり光る事で感情を表現している。

性格は…熱血？（継夢談）

それでは後編までさらばっ！！

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！

先に注意させていただきますが、今回は千冬さんのキャラが激しく崩壊してありますので、注意してください。

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！：後編」

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！！：後編」

継夢の問題発言の後、継夢が細かく説明してくれた。継夢のＩＳは元は継夢の義足ついでに束さんが作った物（ついでに作る物か？）らしい。

さらにコアも本来のＩＳとは違う製造法で作った為、継夢曰わく「ネクサスは正式なＩＳではなく、ＩＳに近い何かだけど面倒くさいからＩＳでいいや。」と束さんが言っていたらしい。

今は放課後で俺は継夢にＩＳの基礎知識を教えて貰っていたが、

「……サッパリわからん…」

「全く一夏、いくらなんでも新品の資料を古くなった電話帳と勘違いして捨てるか普通？それと今全く分からないのはツケだからな！！」

継夢が俺の胸に突き刺さる一言を言っていると

「あっ織斑君、真木君、２人共。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「「はい？」」

山田先生が俺達の元へ来て

「えっとですね、二人の寮の部屋が決まりました。二人ともの部屋は申し訳ないですけど女性と女子との相部屋となります。」

「ん、先生？一夏の部屋決まったのですか？」

「そうだよな、前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど、しかもさっきの言い方、何かおかしくありませんか？」

「いえ、実は真木君の部屋は決まったのですが、突如デカい物体によって部屋が半壊、急遽部屋割りを変更しました。それに事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。・・・・そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

「聞いていませんが、謎の物体って大丈夫なんですか！？」

俺が慌てていると継夢は溜め息をついて、

「安心しろ一夏、恐らくそれは僕のＩＳ専用整備＆移動用便利メカ「ストーンフリューゲル」だろうね。」

と言うと教室の扉が開き、

「真木、あの馬鹿（束）からの贈り物だ。」

ご立腹な様子の千冬姉がフヨフヨ浮いている白と赤の物体を引っ張っていた。

～～～～～～～

俺はあれから織斑先生からストーンフリューゲルと荷物の入ったバッグを貰い、山田先生からは部屋の鍵を受け取り（正確には千冬さんが鍵を山田先生の手から奪い取り、俺達に渡した。）、一夏と共に（後を女子）寮の部屋へ向かった。

寮の入り口に部屋番号ごとに何階か振り分けられている板を見ると僕の部屋は一階で、一夏の部屋は二階にあるようだ。

「おっ、継夢と違う階なんだ。」

「じゃあ一旦別れるか、それじゃあまた明日。」

俺はこうして一夏と別れ、部屋へと向かった。

～３０分後～

俺は自動販売機で買ったミネラルウォーターを飲み干し、頬を数回叩いた。何故なら俺の暮らす部屋には何故か

学生寮監督、織斑千冬控え室

と書いた札がぶら下げられていた。

勿論俺はそれを素直に受け入れられる程単純じゃない。一階を三回ほど他に部屋は無いのか探し回ったが、現実は優しくなく、部屋らしきものは無かった。

「同級生ならまだいいが、よりにもよって…千冬さんと同じ部屋かよ…気が滅入るよ。なぁネクサス。」

俺の言葉にネクサスは短くチカッと光ったが恐らく「知るか！！」と言っているんだろうな…俺は唾を飲み、意を決し鍵を入れよう時、

「継夢、何をしている？私の部屋に何かようか？」

俺はハッと声がした方を見ると千冬さんが少し殺気だって立っていた。俺は恐る恐る

「いや…何故か自分の部屋が個々になっていまして、何かの間違いかもしれないので試しに鍵が会うのかどうか実験を…」

と言うと千冬さんは一瞬忘れていたような顔をした後、

「す、すまないが少し待ってくれないか？部屋の中に書類とか、教材が散らばっているからな、良いな！」

とズイッと近づきながら言い、俺も思わず後ずさりした。その隙に千冬さんは滑るように部屋へ入っていった。大方部屋に書類だけでなく、下着とかも散らばっているんだろうな…私生活は結構いいかげんって束さん言っていたからな～

～数分後～

ガチャ

「準備ができた…入れ」

ドアを開けて千冬さんが俺を睨んだ。俺は

「お、お邪魔しま～す。」

ストーンフリューゲルを引っ張りながら部屋へと入った。部屋は元々は二人部屋なのかベッドが２つあったがクローゼットの方を見ると扉の間からブラのホック付近が見えていた。しかしそれを注意する前に

ギュッ

「ほえ？」

「全く心配したんだぞ…この馬鹿者が」

千冬さんが抱きついてきた…正確には鯖折りだけど今はまだ少し痛いぐらいなので身体的には大丈夫だ。

まぁ千冬さんは女性からも強さは勿論の事、スタイルも人気がある。何が言いたいと言うと…俺の顔に胸が、当たっている！？このままでも良いけど息が苦しくなったので

「千冬さん…苦しい」

「あっすまないな。継夢」

千冬さんが俺を離すと真面目な顔になり、

「しかし、お前、あの場で問題発言をしてくれたな。今頃政府が大慌てになっているはずだ。ＩＳもいつか取られるぞ。全くアイツは気まぐれで作るなよ。」

千冬さんは呆れた感じで言ったが、

「あぁ、その事なら束さんが政府に俺のＩＳは新型コアの実験機と言うことにしているので取られることはありませんし、束さんはどこかに固まって研究をしないので、僕に拷問しても意味は無いと通達済みだそうです。」

「そうか……あの束がお前の為にそこまでやってくれるとは…信じられないな。」

「千冬さん…それは俺も思いましたよ。」

俺はふとあることを思い、千冬さんに尋ねた。

「そう言えば千冬さん、なんで俺にこの部屋の鍵を渡したのですか？一夏の方が楽だと思いますが？」

そう言うと千冬さんの顔は赤くなり、

「いや、その…なんだ…お前と話したかったし…一緒の部屋にさせたかったから……」

「ん？最後の方が聞こえ無かったのですが？」

「ええい、今日はもう遅いから飯を食べて、寝るぞ！！」

千冬さんは俺に指を差した。俺も部屋の時計を見ると7時を過ぎていたので、俺はこの部屋にキッチンが付いていたのを思い出し、

「じゃあ、今日は自分が晩飯を作りますよ。腕は大して良くありませんが、」

「い、いや、楽しみにしているぞ！！」

俺はバッグから割烹着を取り出してそれを着て、ストーンフリューゲルに入っていた米と味噌を取り出し、料理を作り、それを千冬さんと二人で少し話しながら食べて、シャワーを浴び千冬さんが使ってない方のベッドに入り目を閉じたが…

「（寝れねぇ…）」

千冬さんが隣で寝ていると考えたら少し緊張してしまい、それでは駄目だと思い千冬さんに背を向けて寝るようにしたのだが、背後から強烈な視線を感じて中々寝れなかった。

そう言えば千冬さん、ゲンおじさんの道場で稽古している時も俺の方を見ていたな…俺何かしたっけ？千冬さんみたいに強くなりたいとは言ったけど、それは違うだろうし…そう考えながら俺は意識を手放した。

～～～～～～～

継夢がシャワーを浴びているときに私の携帯に着信が入った。それは束からで私が出ると

『もすもすひねもす～皆のアイドルでつぐむんの妻の束さんだよ～♪』

私は継夢の下りで私は電源を切ろうとしたが、

『わ～ストップ！！ストップだよちーちゃん！！半分くらいジョ

ークだよ！！ジョーク！！ちょっとつぐむんの事で話があるの！！』

半分くらいと言うのが気に触ったが、継夢の事の内容が気になり、

「でその内容は一体なんだ？ＩＳの事か？」

『残念ながらＩＳではないんだよね～。その事は私が既に政府に脅しているから安心してね♪』

「では一体なんだ？足の事か？」

私が冗談半分で言ったが、束は少し悲しそうな声で

『うんそうなんだ。昔つぐむんは土砂崩れに巻き込まれたでしょ？』

「あぁ、それで両足しか見つからず死んだと勘違いされた…それがどうかしたのか？」

『実は今もその時の事がトラウマになっているみたいで寝ていると、その夢を見ることが少なくなったけどあるみたい』

「まあ、それはそうだろうな。私だってそういう目にあったらなるだろう。」

すると束は何時もの声の調子に戻り、

『それで束さんの実験結果では一緒の布団とかで寝るのが一番継夢が安心して寝られる事が分かったのだ！！』

それを聞いた瞬間私の手に力が入り、私は束を怒ろうとしたが、

『それじゃちーちゃん頑張ってね！！』

と言い電話を切られた。そして継夢が寝た後、私は自分のベッドから音を最大限殺して出て、継夢の近くに立ち、

「こ、これは私の為でなく、継夢が決闘で支障が出ない為にするのだからな…勘違いするなよ、私…」

と自分に言い聞かせ、継夢のベッドに潜り込み、継夢を背中から抱いて私も寝た。

〜〜〜〜〜

俺は今物凄く混乱している何故なら千冬さんが俺のベッドで、俺を抱いて寝ていたからだ。多分あのウサミミが、俺が悪夢でうなされない為とか言ったんだろうが、確かにあの時の夢は見なかったが…

「なんで千冬さんとゲンおじさんにジープで追いかけられる夢を見たんだろう…ハァ」

ふざけた悪夢を見てしまい、俺は千冬さんを起こさないように抜け出し、汗を流すためにシャワーへと向かった。

「まさか、決闘までこれは続かないよな？」

俺はネクサスに聞いたが、ネクサスはチカッと光っただけで、俺の求めていた答えは出なかった。

そして今日みたいな事が決闘の朝まで続いた。…あぁ、部屋替え

してぇ…

第一話「先生（副担任）！！周りの生徒と先生（担任）からの視線が怖いです！

次回はセシリアの決闘ですが、攻撃をバク転や横転で避けるのはありでしょうか？

感想待ってま～す！！

第2話「蒼い雫対銀色の戦士」（前書き）

今回はセシリアとの決闘です！

第2話「蒼い雫対銀色の戦士」

第2話「蒼い雫対銀色の戦士」

決闘当日俺達は試合用のアリーナにあるピットで待機していたのだが、

「なぁ、箒ＩＳの事教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「目をそらすな！！」

どうやら決闘までの間、一夏は幼なじみで束さんの妹？（束さんよりしっかりしてそう）の篠ノ乃箒（しののほうき）さんにＩＳのことを教えて貰う予定だったが、前に道場で剣術の稽古をしていたのを見たが、どうやらそれだけしかやっていないようだ。

「し、仕方ないだろ。真木とは違ってお前のＩＳが来ていないのだから！！」

一夏には政府から専用機が来る予定だったのだが、それが来てないのであった。

「それもそうだなって、そうじゃなくて、それならＩＳの基本知識とかそういうのが有ったはずだぞ！！」

「……」

「目をそらすな！！」

一夏はそう言いながら箒さんに詰め寄るが俺は

「あ～一夏に箒さん？俺も今日の為の特訓なんて特にしていないよ。」

俺の言葉に二人は

「「はい？」」

と唖然としていた。直ぐに箒さんは

「で、ではお前は今日まで一体何をして過ごしていたんだ？」

と少し睨みながら聞いてきた。しかし箒さん、本当に束さんの妹か？しっかりしているけど？

俺は周りを見て、織斑先生がいない事を確認して

「俺は織斑先生と同室なのは二人には話しただろ？」

俺の言葉に一夏は「あぁ…」と頷き、箒さんは首を傾げていた。まぁ一夏は千冬さんの弟だから分かるよね…。

「だから、織斑先生と同じ部屋である事が何故ＩＳの特訓が出来ない事に繋がるのだ？」

箒さんは俺に近づいて殺気を飛ばすが、俺はそれを受け流して、

「いやぁ、千冬さんは強いけど私生活は意外とだらしなくて、洗濯物とか溜まっていたからそれの洗濯とかスーツにアイロンアイロンを掛けていたら、時間がかかって結局ＩＳの微調整しか出来なかったよ。」

「織斑君、織斑君、織斑君！！」

俺が話していると山田先生がパタパタと慌てて走ってきたが、見ていて危なかっしくてしょうがない。

そして一夏はここでしょうもない事をした。

「山田先生、落ち着いて深呼吸をして下さい。」

「す～は～、す～は～…」

「はい、そこで息を止めて」

「んっ！？」

山田先生は真面目に息を止めて段々顔が赤くなっていき、一夏はポカンとしていたがこのままだと山田先生が窒息してしまうので、

「山田先生、もういいですよ。」

「プハァ！！ありがとうございます。」

その時

スパァアン！！ゴチンッ！？

「イテッ！？」

「アガッ！？」

一夏と俺の頭に千冬さんの宝刀「出席簿」と拳が炸裂した。

「目上の人には敬意を払え馬鹿者、それと継夢、恥ずかしいから言うな！！」

「す、すいません…（ならブラとか下着とか自分で洗濯してくださいよ。）」

「そ、そんな事より織斑君のＩＳが来ました！！」

山田先生がそう言った時、俺が持っていたネクサスのクリスタル部分が激しく光り出し、

「おっと、じゃあ俺は行くか。」

俺は皆に背を向けた時、一夏は

「ま、待ってくれ！！先に俺を行かせてくれ！！」

「馬鹿者が貴様のＩＳはフォーマットとフィッティングが済んでいないんだぞ。」

「そうですよ！！真木君のＩＳは終わっていますし、織斑君には少しばかり時間が必要なのですよ！？」

教員勢に言われて一夏は引き下がり、今度は織斑先生が

「継夢、セシリアは相手が男ということで油断をしている…天狗になっているアイツの鼻っ柱を折ってこい。」

「それ、教師の台詞としては、如何なものかと思いますが…では、行ってきます。」

俺はアリーナに向かって走りながらエボルトラスターを鞘から抜き、光が俺の身体を包み、俺はアリーナへ出た…あ、言語変換機能戻すの忘れてた…ま、いっか。

〜〜〜〜〜〜〜

「……では、行ってきます。」

継夢は俺達にそう言うとアリーナに向かって走り始め、ネクサスの鞘を引き抜くと継夢は光り輝き、飛んでいった。

俺達は直ぐにピットにあるモニターを見た。

アリーナには既にセシリアがＩＳを展開して待っていた。ピットからでた光は空中を一回転して地面に向かい、

ズシャアアア！！

継夢が着地したところに砂煙が立ち、砂煙が晴れるとそこには

銀色の体に走る黒いライン…腕についたブーメランみたいな刃物…胸に輝く赤いクリスタル…フルスキン型のＩＳが膝をついてセシリアを睨んでいた。

「あら？逃げずに来ましたのね」

セシリアは挑発じみた言葉をかけるが、

「…」

無言、

「それにしても遅かったですね。てっきり負けるのが怖くなって逃げ出したのかと思いましてよ？」

「……」

また無言、次第にセシリアの額に四つ角がひとつできて

「ど、どうしたのですか？怖くて声も出ないのですか？」

と言うと継夢はゆっくりと左手を顔の前に持っていき、

ブンブン

激しく左右に振り、今度は立ち上がると左右に振った手を手首を変えし、

クイッ、クイッ

とセシリアに対し挑発をした。まあ、あのプライドが高いセシリアは

「いいですわ…踊りなさい！！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

セシリアは手にした“スターライトＭｋ－２”を継夢に迎えて構え引き金を引いた。継夢は素早く体制を整えると

『ハッ！！』

バキンッ！！

素手でビームを弾き飛ばし、両手の拳を握り構えると

『ハッ～～～ヘァ！！』

と驚いた顔をしているセシリアを睨みつけ、セシリアもビット兵器“ブルーティアーズ”を展開し攻撃を開始した。

それからの戦いはセシリアの攻撃を継夢は横転やバク転で避け続けた。岡目八目と言うやつのおかげか、あのビット兵器を操作している時は、セシリア自身は攻撃できない。またビットは継夢の死角を狙うように攻撃している。

すると白式に継夢からの通信が来た。

〔一夏、セシリアの大体の攻撃パターンはわかったかい？〕

「あ、あぁ…でも何でそんな事を？」

〔いや、ただこれで反撃が出来るなと思って…な！〕

通信が切れると同時に継夢のＩＳの両腕が光ると

『ヘヤッ！！』

ビュン！！

腕を振ると光の刃が出てビットを２個破壊した。

「そんなっ！？」

セシリアは驚いていると継夢はセシリアに向かって走り出し、

『ジュワッ！！』

地面を蹴り飛び上がるとセシリアより高く飛び、

『フンッ！！フンッ！！』

光の刃を連続で放ち、セシリアが攻撃に集中出来ないようにして、足をセシリアに向かって突き出すと足に炎が纏われ、継夢は真っ直ぐにセシリアに向かうが、

「かかりましたわね。」

スカートについている筒状の部品が動き、セシリアは笑みを浮かべ

「このブルーティアーズには６基装備されていましてよ！！」

シュゴウッ！！！

その言葉と同時にミサイルが発射され、真正面から突っ込んでいった継夢は

『ヘヤッ！？』

チュドーン！！

ミサイルをくらい、継夢は地面に落ちていったが、

「くっ！？」

空中で体を捻って体制を立て直し着地した。

「グッ！？油断したか…ん？」

呟いていた継夢は首をかしげ、

「あ～～、い～うん、言語変換機能壊れたな。」

継夢の発言からするとさっきのヘヤッとかシュワッは言語変換何たらのおかげのようだ。すると継夢はセシリアに向かい

「先程はあなたの発言を無視して申し訳ない。僕は少々訳ありな人間だったので、俺のＩＳ、ウルトラマンネクサスには声紋でばれないように少々細工をしていてね。あなたの挑発にも答えようとしてもそれを解除しない限り、ちゃんと返せなくてね。失礼した。」

「あらそうですか？ではなんで今はそうはっきりとしゃべれるのかしら？」

セシリアは射撃をしながら言うが継夢は回避しながら

「それはさっきのあなたのミサイルでそれが壊れたので、こうして喋れるわけです…では少し本気を出させて貰う！！」

「え？」

セシリアの攻撃が止まった瞬間、継夢は両手の胸の前に持っていき、

「フン！」

力を入れて広がると継夢の体を赤い光が包み黒いスーツの部分に赤い線が走り、装甲は上級武士の着る裃袴のようなデザインに変わり、白式を装着した俺の前にモニターが出て、そこには

ＩＳ名称、ウルトラマンネクサスアンファンスから、ウルトラマンネクサスジュネッスに変更

と出ていた。俺は視線を目の前のモニターからピットにあるモニターに変えると

「ハッ！！」

継夢は飛び上がり、両腕を光らせて体を高速回転すると連続で打ち出されセシリアも避けるが、ビットに避ける指示が出せなかったためビットは全滅した。

「次はこれだ！！」

継夢はこんどは腕を胸の前で軽く回し、右手を前に突き出すと竜巻ができて竜巻はセシリアに向かって飛び、セシリアは

「キャアアアアアアアアアアアアアア！？！？！？」

クルクルと回りながら地面にめり込み動けなくなった。継夢セシリアの前に立った時胸の赤いクリスタルの上にある青い球体が点滅を始めた。

「ヤベッ、やっぱネクサスハリケーンを使うんじゃなかった！しかしこれで終わらせる！！」

継夢は少しあわてた後、左手、右手の順で胸の斜め下に突き出し、ゆっくりと横へ持っていき上に一度上げると腕をLの字に組んだ。すると組んだ両腕から青い光線が出て、それはセシリアにあたり、光線がとまった後、

『試合終了。勝者、真木継夢』

試合終了のブザーが鳴り継夢は気絶したセシリアを抱き上げてピットに戻り、セシリアを救護室に送った後、左手を腰に当て

「勝ってきたぞ、ブイ！」

と腰に手を当て指でVサインを作った瞬間

「心配させるな！！」

スパンッ！！

千冬姉の出席簿アタックを食らった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

試合に勝った俺は頭を擦りながら千冬さんのほうを向いた。しかもさっき食らった出席簿、ネクサスの装甲を超えて俺にダメージが伝わったぞ！！ネクサスの装甲、調子近距離から戦車砲を食らっても無事なのにあの出席簿、何でできているんだ？

「先生、なぜぶつんですか！？」

俺がそういうと千冬さんは

「当たり前だ！私はアイツ（束）からあんな機能があると聞いてなかったし、あのミサイルの直撃を食らった時、負けたと思って心配したんだぞ！」

千冬さんはそういうが俺は素直に思ったことを口にした。

「まあ、俺も隠していましたし、あの人が素直に教えるわけはないと思いますよ？恐らくちふ（パシン！！）織斑先生がもらったのは基本フォームのアンファンスのデータだけだと思います。」

俺がそう言うと千冬さんは

「それも…そうだな……さて織斑とセシリアの対決は明日持ち越すいいな！」

そういうと足早に立ち去った。俺はネクサスを解除すると一夏富

山で先生が近づいてきて

「あ、真木君、ちょっといいですか？」

「なんでしょうか山田先生？」

俺が答えると山田先生はネクサスの情報をモニターに出し

「真木君は教室にいた時、自分のＩＳをネクサスといいましたが、先ほどはウルトラマンネクサスといましたがなんでですか？」

「そうそう、俺もそう思ったんだよ。」

二人の質問に俺はエボルトラスターをみんなに見せるようにして

「このアイテム自身の名前はエボルトラスターと言って、そしてＡＩの名前がネクサスで、更に俺がＩＳを展開した姿がウルトラマンネクサスと名前が変わるわけなんだよ。ちょっとややこしいかも知れませんが一夏以外はわかりましたか？」

「ややこしいな・・・」

「なるほど・・・興味深いですね。」

「俺だってわかるわ！！」

上から箒さん、山田先生、一夏の順で納得してくれたようだ。そのとき俺はあることを思い出し、山田先生に尋ねた。

「山田先生、僕の部屋はまだ変りませんか？」

「それならちょうど部屋割りを変更し終えたので今日から織斑君と相部屋になりますよ？」

山田先生の言葉に俺は

「た、助かった・・・」

とつぶやくと

「何で助かったんだ？千冬姉の部屋なら安全だろ？」

と一夏は言うが……

「織斑先生俺のことが心配なのか毎晩強烈な視線が俺の背中に突き刺さるわけなんだよ。もう強烈過ぎて寝不足になりそうだよ。（本当はそれにプラス抱きついてきている）」

「あ、でも今日は篠ノ乃さんの荷物の移動があるので、真木さんの部屋替えは明日になりますよ。」

俺は山田先生の一言に地面に手をついて落ち込んだ。そして俺は皆に聞こえないように

「もうアレをするしかないな…ハア…」

と呟いた。

～～～～～～～～～～～～

私が職員会から自分の部屋に戻ると

「あ、お帰りなさい織斑先生、晩御飯出来てますよ。」

割烹着姿の継夢が晩御飯一膳分を持っていた。

「部屋にいる間は千冬でいいよ。継夢はもう食べたのか？」

「ええ、先にいただきました。それと食器は軽く水に流した後食器洗い機に入れてくださいね。」

「ああ、しかしお前はまるでドラマで見るお母さんみたいだな。」

「束さんの下にいたら嫌でも家事をしなくていけませんからね…今日は少し疲れましたのでもう寝ますね。」

継夢はマグネット式の札を持って私に言ってきた。私は味噌汁を軽くすすり

「ふむ、そうか。明日の授業寝るなよ。」

「寝たら怖そうですね。ではおやすみなさい。」

継夢はそう言うとストーンフリューゲルの前に立ち、手をかざすと

ピッ！バシュウ！

ストーンフリューゲルが開き継夢はマグネットを張り、中に入り中から操作すると扉は閉じた。マグネットには

真木継夢睡眠中、御用のある方は三三七拍子でノックしてください。

と書いてあった・・・しかしこの味噌汁うまいな・・・・。

第2話「蒼い雫対銀色の戦士」（後書き）

なんか書いている継夢と千冬が夫婦になってきた・・・しかも旦那が継夢じゃなくて千冬に・・・アレェー？

第3話「力こそ正義…あっ、ＩＳ学園では普通か…」（前書き）

かなり遅くなってすいませんでした！！今回は歌詞ネタを多少使っていますが……大丈夫何でしょうか？まぁ楽しんでいただければ幸いです。

第3話「力こそ正義…あっ、ＩＳ学園では普通か…」

３話「力こそ正義…あっ、ＩＳ学園では普通か…」

はぁい！！どうもＩＳ学園の男子の朝ご飯はパンの方が良い継夢です。今朝のＳＨＲ中で山田先生が、

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

と言っていた。すると一夏は手を上げ、

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は一週間前の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？しかも俺は継夢とは闘っていません。」

そう、俺とセシリアが闘った翌日に一夏が闘ったが一夏のＩＳ「白式」の武装である雪片弐型はかなりエネルギーを食うらしく、後もう少しの所で一夏の負けになったらしい…

因みに俺はその時、日本政府に「束さんはいまどこにいる」とか、「ＩＳのデータを寄越せ」とかの相手を、山田先生と一緒にしていたので試合は見れなくて、後で織斑先生に聞いたのだ。

勿論政府にはその時に居場所については「束さんが今どこにいるのか分かったら俺だって合流するのに苦労しない」と言い、ネクサ

スのデータはアンファンスだけは渡した。ジュネッスは僕の戦闘法に合わせて発展した姿なので参考にならないと言ったが、納得してくれなかったのでレンタルしたジープで追いかけ回して帰らせたｗｗｗ

さて、話はクラス代表に戻って一夏は抗議しているが、セシリア（本人がそう呼んでほしいと言った）は謝罪を含めて譲った事を説明したが、一夏は

「セシリアについてはわかったが、継夢についてはどうなんだよ！！」

すると織斑先生が溜め息をついて

「では織斑一つ聞くが、オルコットに勝った継夢にオルコットに負けたお前が勝てると思っているのか？今まで生身でも勝っていないだろう。」

織斑先生がそう言うと一夏はウグッと言い、席に戻った。

因みに生身でと言うのは昔一夏は織斑先生に連れられてゲンおじさんの道場に来て一緒に修行した仲でもあるのだ。

そして、その修行の様子はこんな感じである。

「一夏と継夢、今日はこの大岩を蹴りで割ってみろ！！」

「げ、ゲン師匠！それは流石に……」

「はい！！行くよ一夏君！！！」

「マジかよ！？」

「割れなかったらジープで二時間追いかけるからな！！」

とこんな感じである。勿論俺は岩を破壊して一夏はジープで追いかけ回された。

そしてクラス代表は一夏になり朝のＳＨＲは終わった。

場所は変わり俺達は今千冬姉の授業を受けている。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、真木試しに飛んで見せろ。」

「はい！」

「うしっ、行くか！」

セシリアと真木はそれぞれ皆の前にでた。俺は少し遅れて出てガンドレッド状態の白式に手を置いた。

しかし基本ＩＳはアクセサリーの状態で待機していると教本に書いてあったし、セシリアのＩＳもイヤーカフスになっているけど、俺のは完全に防具だよな……でも継夢は短剣だから武器だな…

「何をボ～としている！」

千冬姉が俺に注意して来ると継夢が来て

「まぁまぁ、織斑先生ここは俺が…、一夏は初心者だからＩＳの名前を呼んで上げながら展開しては？とりあえず見本を…」

継夢はそう言って俺達から少し離れ、エボルトラスターの鞘と柄をそれぞれ掴み、

「ネクサァアアアス！！！」

と叫びながら引き抜き光に包まれた後、

ズンッ

ＩＳを装着した継夢が俺の前で着地して立ち上がり腰に手を当て

「とこんな感じだね。因みにイメージとしては奥からＩＳを装着した自分が出てくる感じかな？試しに一夏の場合はガンドレッドを上につきだしながらやってみて、」

継夢の提案に俺は頷き、

「来い、白式！！」

ガンドレッドを上に突き出して叫び、白式は俺に装着された。千冬姉は俺達の姿を見て

「よしならば飛んでみろ。」

千冬姉の言葉にまず継夢が地面を蹴り、続いてセシリアが上空へ上がり俺も飛び上がったが、二人の速度より遅かった。

『遅いぞ、今のスペック上ならスピードはアンファンスと同じだぞ。』

千冬姉の通信が入ってきたが、

「とは言っても、『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』なんてどうすりゃいいんだよ！」

俺が呟くとセシリアと継夢が近づいてきて、

「織斑さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ。」

「そうだよ。因みに俺は自分が戦闘機と思って飛んでいるよ。一夏の場合は白式に翼があるから…多少は無理があるかもしれないが、鳥をイメージしてみてはどうだい？」

「おう、なら試してみるか。」

俺は頭の中で羽ばたくようにイメージすると少しだけスピードが上がり始めた。継夢もスピードを上げて俺の方を向きながら

「うむ、上手くいったな…一夏は教えるとスポンジの用に吸い取ってくれるから将来が期待できるね。」

「いやいや、継夢が教え方が上手いだけさ。」

「ハハハハ、こやつめ。」

俺達がそう笑いあっていると

『お前ら、いつまで飛んでいるつもりだ。』

俺達か下を見ると腕を組んでインカムを奪い取った箒と千冬姉が俺達を睨んでいた。

『順番に急降下と完全停止をやって見せろ。　目標は地表から１０センチだ。』

千冬姉の命令にまずセシリアがかなりの速度で降りていき、地表から約１０センチの位置で止まり、千冬姉も

『よし、ちゃんと出来ているな。よし、次はどっちが行く？』

と俺達の方を向いたとき、

バジッ！！

継夢「ん？」

継夢の両足に電流が走ったと思ったら、

ガクッ

継夢「ウォオオオオオ！？！？」

継夢はネクサスを装着したまま地面に向かって落下していった。

皆は驚き、俺は継夢を助ける為に急降下をした。

一夏「継夢！？」

俺は手を伸ばそうとしたその時継夢は

継夢「何のぉ！！」

と叫び体勢を整え、

ズゥン！！……パラパラ……

地面に足から着地して、継夢の周りにグラウンドの土が舞い、そして落ちていき、継夢は直ぐに止まれない俺の方を向き、

継夢「フンッ！！」

両手で俺を受け止めた。俺の動きが完全に止まると千冬姉が近づき、

パァン！パァン！！

継夢と俺の頭を出席簿で叩き、

千冬「色々注意するがまず真木、誰がカッコ良く着地しろと言った。次に織斑、助けに行ったお前が逆に助けられてどうする？あのまま行ったらグラウンドに大きなクレーターが出来ていたぞ。」

千冬姉が一通り叱り終えると継夢は煙が少しでている足を見て

継夢「あの、織斑先生。一ついいですか？」

と申し訳ない感じで尋ね、千冬姉も

千冬「なんだ？」
継夢「放課後、どこでもいいので整備室を借りる事って出来ませんか？ここ最近メンテナンスを怠っていて、さっきのがトドメになって義足が壊れちゃった……テヘッ♪」
手を合わせて継夢はそう言ったがＩＳごしで背筋から冷や汗が大量に出ていた。
千冬さんは
千冬「ハァ、分かった…山田先生、昼休みに継夢に整備室使用許可に必要な書類を渡してあげてくれ。」
と言いながら今度は俺に近づてきて、
ゴッ！！
強烈な一撃（しかも出席簿の角）で俺の頭叩き、
千冬「では次に武器の展開を実演して貰う。ではまず、織斑」
千冬姉がこっちを見ながら言った。俺は痛む頭をさすりながら、
一夏「お、俺から！？継夢じゃないのか？」
と言うと継夢は
継夢「一夏…実は俺のＩＳ、ウルトラマンネクサスには内蔵火器の他に装備はしていないのだ！！…元々コンセプトが肉弾戦だし、

武器使うの苦手だしね！」

とキリッとしながら叫ぶと

皆「「「「「「「エエエエエ！？！？」」」」」」」

生徒Ａ「嘘っ！？それ欠陥品じゃん！」

生徒Ｂ「でもそれでも代表候補生に勝つなんて凄い！！」

生徒Ｃ「そこに痺れる！！憧れる～～！！」

のほほん「うわ～凄いね～！！」

クラスの皆が騒いでいたが千冬姉の一声で静まり、俺は武器展開のスピードが遅いこととセシリアは展開した時のポーズと格闘武器の展開速度が遅い事を注意されて授業が終わった。

継夢は立ち上がり足の動作確認をして歩いて戻っていき、俺はグラウンド整備に向かった。

（特にこれと言って思いつかないので放課後までキングクリムゾン！！）

俺は書類を書き、織斑先生から許可を貰いストーンフリューゲルに桃白白みたいに乗りながら整備室に向かった。

整備室についた俺はまず義足とトーンフリューゲルに専用ケーブルをつなぎ、俺の目の前にディスプレイが出てきて今の状態が表示された。

「あちゃー、やっぱりこの間の大移動（プロローグ参照）が原因か…」

俺がそう言うとネクサスは怒るようにチカチカと光っていた。まぁ大移動の時何回も注意していたのを俺はつい無視しちゃったからね。

「まぁこの程度なら、束さんがストーンフリューゲルの中に入れてきたパーツの交換とクリーニングですむな……よし、終わりっと次に動かして光線技や身体能力の微調整だな。」

俺はコードを外しアリーナに出てエボルトラスターを顔の前に両手で持ち、少し引き抜いてＩＳを装着する。装着したと同時に俺の前に動いている的がいくつか出てきた。

『シェアッ！！』

俺は一度構えてから的に向かって走っていった。〜〜〜〜調整の様子は音声たけお送りします。〜〜〜〜

『ヘヤッ！』

ズンズンズン……バキッ！！（一番近くの的に向かって走りパンチで壊す）

『シュワッ！！』

ダッ！！グシャ！！（跳び蹴りで的を壊す）

パシャ！

『デュアッ！！』

スパンッ！（エルボーカッターで斬る）

パシャパシャ！

『ハッ！……ハイヤァアアアアアアアアアアアアア！！』

パシャパシャパシャパシャ！！！！

チュドーン！！（レオキックで的を爆破）

～～～調整終わり～～～

俺はクロスレイ・シュトロームで最後の的を壊した後、言語変換機能を解除した後入り口の方を向いて、

「そこにいる人、隠れてないで出てきて下さい。」

俺がそういうと入り口の陰からカメラを持った服のリボンからして二年生の先輩が出てきて、

「いや～ごめんなさいね。なんか入り辛かったから…あっ私は黛(まゆ)薫子(ずみかおるこ)で新聞部副部長をやってま～す。これ名刺ね。」

「あっこれはどうも…そしてこれは自分の名刺です。」

「あっ有り難うね～～」

名刺をしまった先輩は今度はメモ帳と筆記用具を取り出し、

「さてそれじゃあ早速二人目のＩＳを動かせる男の子として一言いただきかせて貰います！！」

「う～ん…そうですね。」

俺はなるべくインパクトのある一言を少し考えた後、手をポンと叩き、

「まずくて、やばくて、ピンチの連続のそんな時、いつでも呼んで下さい！！いつかは駆けつけます！！」

「お～なかなか面白そうな事を言うね～～、では今後の抱負ついて一言！！」

と薫子先輩はペンをマイク代わりに俺に向け、俺は

「今はまだ同級生ぐらいにしか名前を知られてないが、いつかは誰もが知っているウルトラの戦士になりたいかな？」

とサムズアップしながらインタビューに答えると薫子先輩は満足した顔で

「うん、なかなか捏造しがいのあるコメントだね。」

「えぇ、捏造するの！？それならもっとふざけていたのに残念だ。」

俺は悔しがったが、薫子先輩は

「ふふふ、それはすまないね～それじゃ次は織斑君にインタビューさせて貰うからバイバ～イ」

と手を振りながらアリーナから去っていき、少しして

「あ、そういやこの後一夏のクラス代表就任祝いパーティーがあるのだったな……って急がないとヤバい！！」

俺は急いで更衣室に向かい、シャワーを浴びて、制服に着替えて食堂に向かったが、元々普通の人より歩くのに体力を使う（らしい）義足＋陸上部並みの全力疾走で向かった為、会場に着いたとき俺は汗だくで一夏には

「継夢……汗かき過ぎ…」

更にセシリアには

「全く汗だくでパーティーに出席するとは、マナーがなっていませんよ。」

と少し冷たい視線で見られた……ネクサスのままでくれれば良かった。

第3話「力こそ正義…あっ、ＩＳ学園では普通か…」（後書き）

継夢が食堂に移動する際の出来事

「ウォオオオオオオ！！やぁああってやるぜぇえええええ！！」

カチャカチャカチャカチャ！！

継夢が廊下を爆走しているとたくさんの資料を持った眼鏡をかけた青髪の女の子にぶつかりそうになる。

「おっとぉおお！？」

ポロッ

継夢は片足を軸に女の子の周りを滑るように回避して一旦止まると女の子の方を向き、

「これはすまない！お嬢さん怪我はないか！？」

「……ない」

「そうか！！ちゃんと謝りたいが、今俺は急いでいるのでこれで失礼！」

カチャカチャカチャカチャ！！

継夢が走り去った時、女の子の足元が光り、女の子が視線を向け

るとそこには白色の短剣のような物のクリスタルの部分から緑色の光を放っていた。

女の子は短剣を拾い、

「……何これ？」

と呟いたが短剣…エボルトラスターを制服のポケットに入れ、女の子…更織簪（さらしきかんざし）は整備室に歩いていった……つうか、継夢自分のＩＳを落としたぐらい気づけ！！

第４話「転校生は友のセカンド幼なじみ…でもそんなの関係ねぇ！！（古ッ！

２０１２年初投稿はＩＳでした。今回あの中国娘が出ますが一夏との関わりは原作と大して変わらないので飛ばさせていただきました！！

それではどうぞ！！

第４話「転校生は友のセカンド幼なじみ…でもそんなの関係ねぇ！！（古ッ！？）」

第４話「転校生は友のセカンド幼なじみ…でもそんなの関係ねぇ！！（古ッ！？）」

おはこんばんにちは、ＩＳ学園の飴玉は最後まで舐める方の織斑一夏です。突然だが今言いたい事がある。それは……

「なぜ放置……」

ん？何故こう言いたいかって？それは本来俺の横の席で朝のＨＲを聞いているはずの継夢が床に頭にたんこぶを三つ作り気絶しているからだ。

こうなったのは俺が朝教室に来たときまで遡る。

～数十分前～

俺が教室に来た時、朝早く起きて先に来ていた継夢が

「……死にたい」

と物騒な事を言っていた。その時

ガラガラガラ

「皆さんおはようございます。真木君は…いましたね。」

山田先生が来て

「真木君落とし物のお届けにきましたよ。拾ってくれた人の名前は後で教えますので、お昼休みにでもお礼を言いに行ってくださいね。」

そして継夢の机の上に置かれたのは継夢のＩＳであるネクサスであった。

継夢の暗かった顔は、どんどん明るくなり、山田先生を真っ直ぐ見て

「山田先生！！」

「は、はい！？」

「ありがとうございます！！」

よっぽど嬉しかったのか継夢は机から立ち上がり、山田先生に抱きついた。

「「「「「「キャアアアアアアアアア」」」」」

周りは黄色い叫びを挙げ、写真を撮ったりしている人もいたが、

「何をしているんだ……継夢？」

一人の声で教室の空気は一変、我に帰った継夢と俺は恐る恐る声のする方を向くと、

「……（怒）」

そこにはダースベイダーの曲（オーケストラ版）　をＢＧＭにしている鬼神（千冬）が立って

「ま、待って千冬さん！！これは相棒が帰ってきた事と睡眠不足と若さ故の過ちと言うもので……」

「今は織斑先生だ。そして問答……無用！！」

スパパパァ――ン！！！！

「ダイナァァァァァァ！？！？」

千冬姉の出席簿の攻撃により継夢はＳＨＲじゅう気絶していた。

～そして一時限の休み時間～

「あ～今度こそ死ぬかと思った。こっちとしては二度目の葬式はコリゴリだよ。」

「タフだな継夢・・・やっぱり俺よりもクラス代表向いているって」

「そうだよね～・・・だが断る！ていうか前に言っただろ！！ネクサスはまだ正式にＩＳと決まってないんだぜ、もし政府から認められなければクラス代表になった意味がないんだよ！！」

俺は起き上がったばかりの継夢が話していると箒とセシリアも来て

「しかし、まったく情けないぞ継夢、専用機を落とすとはな。」

「そうですわそれでよく私に勝てたものですわね。」

チカッチカッ！（訳：同意）

「グフッ！？…す、すまないね。それよりも今度のクラス代表対抗戦に向けての事なんだけど…」

二人（と一体？）の言葉に継夢は話を変えると周りのクラスメイトも入ってきた。

「織斑君が勝ってくれるとクラスの皆が幸せだよー。」

「織斑君も頑張ってー！」

「学食デザート一年無料フリーパスのためにも！！」

「今の所専用機を持っているのは1組と4組だけだから余裕だよ！」

そういった瞬間

「その情報古いよ・・・」

教室の入り口の方を見ると

「2組も専用機持ちがクラス代表になったんだからそう簡単に優勝できないから」

ツインテールの俺のセカンド幼馴染の、

「鈴？…お前鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ…って継夢が本当に生きている！？」

とかっこつけていたが、継夢が隣に立ち

「久しぶりと言いたいが、鈴が絡むとなんかややこしいことになりそうで、面倒くさいから……義足外し！！」

「ひえええええええええええええええええ！？！？！？足が外れたあああああ！？！？！？…ガクッ」

継夢の義足を見て気絶した鈴を2組の人を呼びに連れて行ってもらった。継夢はさっきを飛ばしている箒とセシリアの方を向き、

「ああ、彼女は箒さんが引っ越した後に仲良くなった子で一夏曰く「セカンド幼馴染」って所だ。だから（一夏の彼女じゃないから）安心しろ。」

「む、そうか・・・」

「そ、それを聞いて安心しましたわ。」

殺気を消した二人はそう言い席に戻っていったが…何で起源が悪かったのかわからないな。

―――――――――――――――――――――

昼休み俺は一夏と別れネクサスを拾ってくれた女の子のいるクラスへ向かうため歩いていると、食堂横で

「おい、継夢坊じゃないか！！」

懐かしい声が聞こえその声の方を向くと

「北斗おじさんじゃないですか！！お久しぶりです！！」

俺が幼い頃に住んでいた家の近所にあるパン屋を経営している北斗おじさんに会った。おじさんは俺に駆け寄り

「いや～、ニュースで見たときは驚いたがこうして再び見れるとは嬉しいねえ」

「俺も嬉しいです！！でもなんでここに？」

そういうとおじさんはフランスを見せて

「実はここの食堂が私の店の常連さんでね。」

「ああ、道理で今朝食べたパンにどこか懐かしさを感じたわけか！」

「それにここのある学園内を移動するためのカート、自転車はそれぞれ郷さん、早田さんが整備をしているんだ！！」

「す、すげえ・・・・ハッ！？いけない！！俺用事があるんだった！！すいません北斗おじさん！！」

俺がそう言いその場を去ろうとしたが北斗おじさんは

「いいって事よ！その前に・・・ホレ」

おじさんは俺に袋を投げ渡し中身を見るとそこにはサンドイッチが入っていた。

「まだ飯食ってないだろ？味はあの頃と変わらない。」

「ありがとうございます！！」

俺は北斗おじさんと別れ、ネクサスを拾ってくれた女の子の４組へと向かった……が！！

「更織簪さんは不在…ですか。」

俺が肩を落としていると４組の生徒は

「うん、彼女は昼休みや放課後はいつも整備室に籠もりっきりだから。」

「そうですか……ありがとうございました。」

俺は４組の教室を後にしてサンドイッチを食べる為にベンチを探していると

「あ、つぐむんだ！お～い、つぐむ～～ん！！」

籠を持った本音さんがダボダボな袖を振りながら俺に近づいてきた。

「あぁ、本音さんか。」

「こんな所で会うなんて奇遇だね～つぐむんは何をしていたところなの？」

「俺はネクサスを拾ってくれた人にお礼を言いに４組に行ったのだけどいなくて、昼休みに言うのは諦めて、サンドイッチを食べようとしていたんだ。本音さんは何をしていたんだ？」

「私はかんちゃんにお昼ご飯を持って行こうとしたんだ～。あ、そうだ！！」

突然本音さんが何か思いついたように声をあげると

「ねぇ、つぐむんは今暇？」

「まぁ人探しは後回しにしたから暇と言えば暇だが……」

「なら一緒にお昼ご飯食べようよ！」

「俺は構わないが…いいのか？」

「良いよ～～それにつぐむんのＩＳ、かんちゃんが見たら喜ぶだろうし！！」

「あ、あぁ……（ネクサスを見て喜ぶ？訳が分からん）」

俺は本音さんの後について行くと整備室につき、本音さんはＩＳの前で空中投影型モニターとにらめっこしている女の子に近づいて

いき、

「かんちゃ～ん、お昼にしよう♪」

かんちゃんと言われた女の子が振り向くと

「本音、かんちゃんって言わないでそれに昼ならちゃんとある……」

と言って栄養食品（カロリーメ〇ト）を見せたが

「駄目だよ～そんなんじゃ身体壊しちゃうよ～」

本音さんも引かない。蚊帳の外になっていた俺はどこかで見たことのある女の子に向かい

「割り込ませてもらうがそのとおりですよ。え～っとあなたの名前は？」

女の子は俺を見た時、

「あなたはあの時の……私は更織簪」

彼女の名前を聞いたとき、俺は驚いたが

「あなたが俺の相棒を拾ってくれた方ですか！！その件ではありがとうございました。あ、俺は真木継夢と言います。」

俺がそう言うと更織さんは

「どういたしまして……」

とさらっと言うとモニターに視線を戻した。俺は後ろからモニターを覗き込むと

「打鉄弐式……へぇマルチロックオンシステム搭載のＩＳか。未完成とはいえ良くできているね。」

更織さんは俺を睨み、

「……勝手に見ないでくれる？」

更織さんの言葉に俺は

「あっすまない。しかしこの機体は君のかな？」

俺は目の前の機体を見ながら尋ねると、更織さんは

「そうだけど…」

「となると君は日本の代表候補生なるのでしょ？」

次の質問に今度は布仏さんが

「そうだよ～かんちゃんは日本の代表候補生なんだよ～」

とありと大きな胸を張りながら言った……何言ってんだろ俺。

そして俺はあることに気づき更織さんに尋ねた。

「４組の専用機持ちって貴女の事でしたか。しかしそうなるとなんで未完成なんだ？」

と言うと更織さんの周りの空気が冷たくなる感じがして、俺は布仏さんの方を見ると、アチャーとこんな感じ↓（ノ∀、）の表情をして俺に近づき、

「実はかんちゃんの機体は最初倉持技研で作られていたんだけど…」

「倉持技研って確か一夏の白式を開発した場所だよね？」

「そう何だよね～。それでおりむーが出てきたと同時に白式の開発に総動員しちゃったから、かんちゃんが未完成の機体を引き取って一人で完成させるつもりなんだよ～。」

俺は布仏さんの説明に感心していた。そして有ることを思いついた。

「そうだ、ネクサスを拾ってくれたお礼にネクサスで役に立つデータをあげるか。」

俺の言葉に本音さんは驚き、

「いいけど…いいの？」

「そうだね、アンファンスのデータは政府にやっていてつまらなくなりそうだからジュネッスにするか！」

「本当にいいの！？！？」

僕達の会話を聞いて更識さんはツッコミをしてその時

「ねえねえ、つぐむんちょっとだけでいいからＩＳ展開してみてよ。」

「え！？大丈夫なのかそれ？「いいから」…はあ、わかったよ。」

本音さんの言葉に俺は二人から少し離れてエボルトラスターを鞘から引き抜き、ネクサスを展開して

「本音さんこれに何の意味が……」

オレが振り向くと更識さんは目を輝かせながらこっちを見ていた。俺は試しに音声変換機能をオン、そして

「ヘヤッ！！」

と構えると更識さんの目はさらに輝き、少し動いてみるとどんどん輝き、本音さんに近づき

「どうかお礼に私のデータを提供したいのだがいいかな？」

と話しかけると更識さんは顔を赤くしながら

「は、はい！！」

と了承してくれた…どういう事か後で本音さんに聞いてみるか

「それじゃあお昼食べよう～～～」

本音さんの言葉に俺は北斗おじさんの「バーチカルサンド」（キレのある味が特徴）を二人に分けて、本音さんの紅茶（意外と美味かった）を飲んだりと意外と優雅なお昼を過ごした。

そして俺は一足先に教室に戻ったのだが

「一夏、なんか疲れてないか？」

「いや、まあ…ちょっとな……放課後は…」

助けを求めるように俺を見てきたが

「すまない、今日の放課後は少し用が合ってな。付添いはできない！」

俺の言葉に一夏は燃え尽き、千冬さんにぶっ叩かれたことは確定パターン

～放課後～

俺は本音さんと一緒に更識さんを迎えに整備室に向かった。

「本音さん何故、彼女はネクサスの姿の時、何故あんなに目を輝かせていたんだ？」

俺の問いに本音さんは

「かんちゃんはね～昔から人見知りが激しくて、それでヒーローものが大好きなんだよ～。ネクサスってヒーローぽかったし、他の

人と仲良くさせるのにちょうどいい機会かな～って」

「ちょうどいいって…まあいいや俺もこの学園で中良い人は増やしておきたかったしな、」

「つぐむん優しい～～♪」

俺達が整備室に着くと昼休みとは違い、多くの人が機材を運搬していたりＩＳの整備をしていたり、ＩＳを分解して中の構造の確認をしていた。更識さんは機材が少し不安定に山積みしているとなりで機体をいじっていた。

本音さんは走り寄って更識さんに走り寄って二人が話している時、

「あ～～もう分かんない！！」

ＩＳと睨めっこしていた一人の女子学生がスパナを投げそれは機材の山に当たると揺れ始めた。俺は足に力を入れ二人に向かって走り出した。

ガラガラ…

「「！？！？！？」」

機材が大きく崩れだし俺は固まっている二人を押した。

ドガッシャーーン！！

―――――――――――――――――――――――――――――――

「う…うん…」

私が目を覚ますとそこは保健室だった。私は体を起こすと

「かんちゃん！！」

「あ、目が覚めましたか。」

入口から声が聞こえ、声の方を見ると本音と一組の副担任の山田先生がいた。本音は私に抱き着いてきて山田先生は

「もう生徒の人から報告が来て言ってみればお二人が気絶していたのですけど本音さんと簪さんに怪我が良かったです。簪さんが今まで眠っていたのはどうやら疲労も重なっていたこともあったのでしょう。」

山田先生の話を聞いていた私は

「そうだ本音！！私達を助けてくれた彼、継夢君は！？！？」

というと扉が再び開き

「おお、目が覚めたのか！」

「全くだ。」

織斑先生と継夢君が入ってきた。

「継夢君大丈夫なの！？」

「ああ、俺は全くの無傷さ。」

彼はそう言ったが無傷であるはずがない。

「そんな、私を押したつまり瓦礫の下敷きになったはず…無傷なわけない！！」

私はそう言いながら継夢君を見ると制服のズボンの部分が破れてあり

「やっぱり無傷なわけないよ足を怪我しているのでしょう！？」

私は彼の手を引っ張るが日の当たりに出た時彼の足は鈍く光った。

「え？足が光った？」

私がそう呟くと彼は頬を掻いて、

「あ～ばれちゃったか……織斑先生構いませんか？」

「ああ、いいぞ。」

継夢はズボンを引き裂くとそこにあったのは銀色の足で

「俺の足は両足とも……高性能の義足なんだよ。」

そして彼は昔山に行ったときに土砂崩れに会い、両足を失ったことその時篠乃野束に会い、今の足とＩＳを貰ったこと話した。話し終えた後、

「まあこんな俺だが、更識さんこれからも仲良くしてもらってもいいかな？」

と暖かな笑顔で手を差し伸べてきた。その笑顔は夕日に照らされまるで本当のヒーローのように見えた。私は

「は、はい！後私の事は名前で呼んでください！！」

「そうか…ならよろしくな簪さん」

「よ、宜しくお願いします！」

と彼の顔に見ほれながら握手をした。

簪さんが気が付き友達になった後日も傾きだした事もあり俺は部屋に戻ることにしたが、

「何でついてくるのですか織斑先生？」

「む？生徒の心配をする当然ではないのか？」

なぜか織斑先生が俺の後ろについてきた。俺は止まり

「いや、俺は大丈夫ですよ。第一瓦礫に足を挟んだだけですし」

「そうだな…しかしお前まだ昔のトラウマが残っていて、それが思い出しているだろ？左腕が震えているぞ。」

俺はとっさに左腕を右腕で抑えるが震えは収まらなかった。

「流石は織斑先生……でも大丈夫「馬鹿者」。」

俺がそう言言いかけた時俺の脳天に織斑先生の拳が直撃し

「アガッ！？先生何w……ムグッ！？！？」

織斑先生に言おうとした時思いっきり抱き着かれ

「今ここにお前と私しかいない……怖かったんだろ？泣いてもいいぞ。人間はそこまで強くないからな……勿論ゲン師匠には内緒にしておく。」

俺はその言葉と温かさで

「千冬さん…グスッ……ウウウウウ……」

俺は千冬さんの体に手を回し泣いた。千冬さんは黙って受け止めてくれた。泣き終えた俺は千冬さんから離れて

「ありがとうございました織斑先生。」

俺がお礼を言うと俺の涙で濡れた上着を脱ぎ肩にかけると

「何、生徒の面倒見るのも教師の務めだ。ではまた明日教室で会おう。」

と男より男らしくその場を去っていった。俺はネクサスを取り出し

「ネクサス、俺はまだまだ修行が足りないな…。」

ネクサスは俺の言葉を肯定するようにチカッと光り、

「ハハッ、即答か…いつか千冬さんと肩を並べて闘える日が来るかな…いや、来るように頑張らなくてはな！！」

俺はネクサスをポケットにしまい寮の自分の部屋へ向かった。

第４話「転校生は友のセカンド幼なじみ…でもそんなの関係ねぇ！！（古ッ！

千冬さんって男より男らしいのがデフォだと思うのですよ…でも片思いの子の事でベットの上で悶えるシーンも見たいのは私だけでしょうか？

それではアディオ～～ス！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6824v/

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉絆(ネクサス〉

2012年1月1日02時49分発行